

<前回・ホワイトヘッド>

(1) ホワイトヘッド哲学へのアプローチ

3. 形而上学の方法＝一般化の方法

数学基礎論から科学哲学、そして形而上学へ（自然学→形而上学）

『数学原理』、『自然認識の諸原理』『自然という概念』『相対性原理』

(1) より高次の一般性へ（終わりなき前進とそのつどの定式化の試み）

経験の事実によって前提とされる一般的観念、自明性を越える

形而上学的志向性（全体へ、宗教と科学）

(2) 数学との対比、抽象化の問題（二つの誤謬）

(3) 一般化と経験への適応（検証）：合理主義と経験主義の統合

(4) 枠組みの構築と想像力、訓練された本能

(5) 知の体系性

(2) ホワイトヘッドの形而上学の枠組み

①現代科学の实在理解とその一般化

②一切の实在は相互作用連関の内にある

actual entity (the final real thing) / the 'principle of relativity'

③現実的存在の構造：現実態は両極的である

環境に限定される → 作用因、機械論的 → 自然的極

自らを形成する → 目的因、目的論的 → 精神的極

二つの極の総合＝合生 (concrecence)

④現実的存在の時間構造：時空的連続体としての現実的存在

過去（環境的過去）・自然的抱握／未来（主体的目的）・概念的抱握（新しさの創造）／
現在・合生

⑤現実的实在はプロセスである（自己創造を通じた世界創造）

・自己創造のプロセス・有機的プロセス（合成 concrecence）＝世界の形成過程への寄与
創造性 (Creativity)、神、永遠的客体 (eternal objects)

・生成から存在へ：現実的存在の三重の性格

1. 過去の世界によって与えられたという性格

抱握 (prehension)：客体に関心 (concern) を持つこと、感取 (feeling)

2. 因果的に限定されながら、ある目的観念を未来において実現するという性格

合生過程：自己原因的、主体

満足 (satisfaction)：主体的目的に実現

3. 後続する現実的存在に対して自らを客体的存在として与える

自らを超え出て自らを他者に与える：surperject（自己超越体）

因果的に客体化される、存在となる

1. 3：他との連関・連帯、2：個としての自由・自己原因

(3) ホワイトヘッドと宗教

1) 宇宙論的構図（目的論的な世界の創造過程）

自然科学から一般化→形而上学

この枠組み内に、宗教はいかに位置づけられるのか

創造性／神／永遠的客体／外延的連続体

目的因／作用因／形相因／質料因、プラトン『ティマイオス』における「神」

2) 神の本性の三重性

5. 神も一つの現実的存在である

In the first place, God is not to be treated as an exception to all metaphysical principle,
involved to save their collapse. He is their chief exemplification. (405)

6. 神の本性の三つのアスペクト（一つの現実的存在としての全体的な神の、相互に独立で相関した仕方）：原初的本性、結果的本性、自己超越的本性

原初的本性：概念的抱握

結果的本性：自然的抱握

三重の本性：神は世界に依存し、世界から独立であり、世界に働きかける

①原初の本性（「神から世界へ」 1－働きかけ・誘因）

7. 永遠的諸客体とそれを現実化する現実的存在との関係性

永遠的客体と外延的連続体から時空的連続体・現実的存在の社会の形成という観点での神の役割、形相によって質料を限定し、現実の世界を構築する

8. 永遠的諸客体の相互の関連性

神による永遠的諸客体の非時間的評価が、時間的世界の経過に先立って非派生的になされる

9. 最初の主体的目的を供給、説得的誘因(persuasive lure)

現実的存在の合生過程を導いてゆくのが、神の原初の本性から直接導き出される主体的目的、理想的な完全性の実現への衝動

10. 外延的連続体の諸現実的存在による原子化が、時空的連続体に結果する。

外延的連続体の原子化、選択的制限は神の決断にもとづく

②結果的本性（「世界から神へ」）

展開する宇宙の諸現実的存在の神による自然的抱握

神の本性は世界の創造的前進の結果としてある。

神による世界の自然的抱握は選択的（＝神の記憶）であり、あるものは消極的抱握を通して神から排除される（＝神の審判）

③自己超越的本性（「神から世界へ」 2－世界への内在）

神が自らを後続する現実的存在に与件として与えること

ホワイトヘッドの神の特徴

↓

3) 神と世界の逆対応

神と世界の逆対応ともいうべき力動的な関係

神に関しては原初の本性が優先、他の現実的存在の場合は過去によって与えられたという性格から出発

神は能動から受動へ、世界は受動から能動へ展開する

4) 万有在神論（ハーツホーン）

・神は永遠的恒常的であるとともに時間的流転的、世界超越的であるとともに世界内在的、世界に含まれるとともに世界を含む、人格的存在者である

<補足>

(1) 系列と社会、秩序、永遠的客体

1. 現実の重層構造

2. 現実の種類（タイプ）：無機的／植物／動物／人間（126-128）→ 次元論への展開

↓

諸機会のグループ化(grouping of occasions)：nexus（系列）、society（社会）

3. 系列：相互内在性(mutual immanence)

空間的系列：諸機会が相互に、同時に（因果的独立性という対称的關係において）、グループ化される幾組かを含む場合

時間的系列：それらが時間的な前後關係において、継起的にグループ化される場合

時空的系列：動物の身体

4. 社会：あるタイプの社会的秩序を例示あるいは分与している系列
 - ・構造をもった社会 (structured society)
 - ・粒子的社会 (corpuscular society)
 - ・継起的秩序を有する人格的社会 (personal society)
5. 諸社会の重層的構造
 - 電磁的諸機会の社会（電子や陽子などの電磁的諸機会て構成される）／
 - 幾何学的社会／四次元的な時空連続体／外延的連続体 (extensive continuum)
6. 永遠的客体化：個的本質と関係の本質（他のすべての永遠的客体和内的に連関）

(2) 外延的連続体：世界の創造的前進の根底に横たわっている

1. 無限な分割可能性 (indefinite divisibility) と無際限な延長 (unbounded extension)
2. 現実的存在が外延的連続体を原子化する、この原子化が時間化。
3. 共通世界の連帯性
4. 宇宙波動方程式によって記述され、その都度の観測（現実的存在の生成）において、時空化する確率的可能的存在
 - 量子の波動性（波動法的式によって記述される確率的存在）観測によって粒子的に見いだされる（波束の収束）
5. 宇宙の連帯性の基礎としての外延的連続体

11. ホワイトヘッドとプロセス神学2

(1) ホワイトヘッドの宗教哲学とその意義

→ キリスト教と自然科学、キリスト教と仏教

「ホワイトヘッドの科学哲学に基づく現代文明についての包括的な形而上学的体系の強み」
 「科学、人間と文化、宗教を包括するような経験論の体系は、米国のプラグマティズムの伝統に親しみやすい多くの類似性を示していた。それと同時に、新しい科学技術の問題に対して、科学哲学と文明論に支えられたグローバルなパースペクティブを提供できた」（森田雄三郎「現代神学の動向」、『現代神学はどこに行くか』教文館、2005年、45頁）。

「プロセス神学が東洋の宗教、とりわけ仏教への深い関心を持つことは、日本人としては、とくに注目しなければならぬであろう。二〇世紀の西洋哲学の中で、仏教思想との接触点を提供できる哲学は、ハイデッガーとホワイトヘッドを置いて、他に見当たらない」（46-47）。

(2) プロセス神学の神学的な挑戦

1. 存在論とキリスト教思想
 - 有賀鐵太郎『キリスト教思想における存在論の問題』創文社。
 - 大林 浩 『アガペーと歴史的精神』日本基督教団出版局。
2. プロセス神学：ホワイトヘッド形而上学概念枠によるキリスト教思想の構築
 - Charles Hartshorne (1897-2000), John B. Cobb, David Ray Griffin, Lewis Ford

① ホワイトヘッドの神 → 宗教の神へ ② 「科学と宗教」 → 新しい有神論の定式化

3. Charles Hartshorne, *A Natural Theology for Our Time*, Open Court 1967
 (Ch. ハーツホーン『自然神学の可能性』行路社。)

- ① 神概念の規定
- ② 礼拝の対象としての神
- ③ アンセルムスの神概念：これ以上大きなものが考えられないあるもの
- ④ ホワイトヘッド哲学に基づく新しい自然神学

⑤宗教と科学との統一性

⑥ギリシャの実体形而上学の不適切さを超えて

4. プロセス神学：ホワイトヘッドのプロセス哲学によるキリスト教神学の再構築の試み＝古代ギリシャの形而上学の概念枠に規定された古典的なキリスト教神学を乗り越え。

完全で自己完結的な神ではなく、人間および世界と相互に媒介し合いながら宇宙の創造過程を前進させる神、つまり、世界の諸存在からの影響を受けつつも（受苦可能）、宇宙を真理・美・平和の実現に向けて説得的に導く神。

5. ハーツホーン：アンセルムス『プロスロギオン』で神の存在論証のために提出した神概念、つまり、「これ以上大きなものが考えられない或もの」(aliquid quo maius cogitari non potest)をもとにして、「どうしても凌駕され得るとは考えられない存在」(the not conceivably surpassable being)という神概念を用いる。

6. 「〈自分自身によって凌駕されうる〉ということから〈他のものによって凌駕されうる〉ことは推論できない。その上さらに、我々の全体性という観念は、〈自己凌駕〉(self-surpassing)が〈他のものによる凌駕不可能性〉とどのように結びつけられるかを明らかにする。」(Charles Hartshorne, *A Natural Theology for Our Time*, Open Court 1967, p.20.)

7. 「これ以上大きなものが考えられないこと」＝「他のものによる凌駕不可能性」＝「自己凌駕性」(自分自身による凌駕可能性)。

プロセス神学が求める神：自らを越えてゆく神であり、その自己凌駕の過程で神も宇宙もより大きな真理と美の実現に向けて進展してゆく。これは、人間やそれ以外の被造物全般に自らとの共働を認めつつ、創造性の前進のためにたゆまず働く神である。

最高存在・最高価値として完全性を完成させた神 (completeness、perfection)、つまり、最上級の神ではなく、それに比べれば、力の弱い神。

比較級の神：預言者からキリストへ迎られる聖書の弱き神を表現するに相応しい、単に弱いだけでなく、世界の全存在と共に苦しみ喜びつつ、最終的には宇宙の創造過程をより大きな真理と美と平和に導く。

8. A forest is the triumph of the organisation of mutually dependent species.

Every organism requires an environment of friends, partly to shield it from violent changes, and partly to supply it with its wants. The Gospel of Force is incompatible with a social life. By force, I mean antagonism in its most general sense.

Almost equally dangerous is the Gospel of Uniformity. The differences between the nations and races of mankind are required to preserve the conditions under which higher development is possible. (Whitehead, 1925, 206-207)

(3) プロセス神学の射程——カブの場合

9. John B. Cobb Jr., *Postmodernism and Public Policy. Reframing Religion, Culture, Education, Sexuality, Class, Race, and the Economy*, State University Press of New York Press, 2002. Chapter Five. Nature, Community, and the Human Economy

Human Beings have always had an economy. ... In the contemporary world, the economy is imposed on the natural world in a particularly jarring fashion. It is far from natural!

The detachment from the natural world has been accompanied by breaking down natural relations among human beings as well. Human beings come to be in communities. In a profound sense the human communities in which they live create them. The economy of the modern world has broken down traditional communities. In its current global reach, this breakdown is being effected almost everywhere. (101)

The economic assumptions that guide global activity today are rooted in the dominant model of modernity. Of greatest importance are the individualistic view of human beings and the dualism of

humanity and nature, with its resultant anthropocentrism. The modern economic model abstracts radically from human community and the interconnectedness of human life with other creatures.

Postmodernism sees matters quite differently. People are constituted by their internal relations to their bodies, to the wider world of nature, and especially to other people. Apart from these relations, they do not exist at all. They are formed and informed in human communities. It is in and through communities that they achieve true individuality and personhood. The model that describes this best is that of persons-in-community. In attenuated form, the community in question includes the natural environment. (121)

From the postmodernist point of view, nature in its full diversity, remarkable capabilities, and severe limitations must be taken very seriously. If there is to be a sustainable future, the complexity and interdependence of natural processes must be considered in ways that are discouraged by the modern economic model. The human economy is a subordinate element in the natural economy rather an autonomous system that can exploit the natural one indefinitely. We must find ways of meeting the real human needs of all and attaining a satisfying life that are far less consumptive than the lifestyles of the affluent today. (123)

10. John B. Cobb, Jr., "Christianity, Economics, and Ecology," in: Dieter T. Hessel and Rosemary Radford Ruether (eds.), *Christianity and Ecology*, Harvard University Press, 2000.

1) 新しいコンセンサスと現状

①状況 (497/1,2)

- ・人間中心主義と二元論について悔い改めるべきである、というコンセンサス
- ・現実にはほとんど変化を生じていない。

②歴史・問題の根 (497/3-499/1)

③技術／経済／エコロジー (499/2,3,4,5)

- ・科学技術は、経済とエコロジーを多様な仕方で関連づける
economy (oikos + nomos) / ecology (oikos + logos)

しかし、これらはまったく独立的に発展してきたのであり、最近まで関係性はほとんど考えられてこなかった。現在はむしろしばしば対立的に見られる。

2) キリスト教の問題性と課題

①キリスト教徒はなぜ破壊を伴う科学技術を支持するのか (499/6-501/1)

- ・科学技術は貧困を縮小する (必要なものを生産し雇用を創出する＝豊かにする)
 - ・キリスト教徒の価値観と経済学者とのそれとの近接性 (物質的な必要を満たすという目標の共有)
 - ・人口増加・人口爆発 (伝統的価値観における生命の神聖性、家族の重視)
- 医学の進歩、人間の生命を救うことは、我々の遺産・魂に深く根ざしている

②自然世界の保持へのコミットメントをはっきりと表現すること (501/2-503/1)

- ・科学技術のあり方の転換

これまでの科学技術は、労働力が少なく、資源と汚染処理スペースが豊富であった時代のものであるが、現在状況は反対になった。生産性とは労働生産性を最大化するのではなく、資源生産性を最大化することを目指すべきである。より少ない資源によって十分に有用な商品を生産すること。この点で、現在の科学技術には多くの改良の余地があり、キリスト教徒はこのシフトに躊躇なく賛成できる。

- ・個々の建物や都市全体を少ないエネルギーと資源によって建設すること
- ・資源の再利用・リサイクル
- ・食物などの農産物の持続可能な形式の発展、一年生穀物を多年生穀物に代える

- ・食生活習慣の変化による土地利用への影響
土地の適した利用（食肉用動物のための牧草地、穀物生産→人間が直接消費する）
- ・古代キリスト教の徳の復興
他者（地球に共に生きる生きた被造物すべて）の幸福のために自分を犠牲にする
→ 消費者志向社会からの撤退
すでに富裕である者は収入や財産の増加を進んで際し控えること。収入と富の再分配についての公共政策の支持。

3) 政策レベルの問題とキリスト教

①税政策の転換(503/2-504/2)

- ・逆進的な税や給与税から資源税・汚染税へ

資源税：貴重な資源の使用に税を課す、良性のエネルギー資源の競争力を高める

汚染税：汚染処理の社会的コスト

こうした動きに対する異論：貧しい者はエネルギーや資源を買う余裕がない。

しかし、この税制の転換によって、一般に貧しい者の負担は軽くなる。所得税の元来の意図は、富の再分配であり、税の再分配的使用は可能である。

- ・建築や改築を無税に土地にのみ税を課す、土地投機を抑制し、有効利用を促進する土地の利益は共同体全体に属している（ヘンリー・ジョージ）

②税と予算による人口増加への抑制効果（歳入歳出政策）(504/3,4)

急激な人口増加が続く国々では、女性の地位の向上がもっとも重要

人類は持続可能な使用の限界をすでに超えてしまった。人口増加（総人口）と一人あたりの消費の不必要な増加とを、抑制しなければならない。

4) 経済成長とキリスト教

①キリスト教徒は支配的な経済的实践と理論とを批判しなければならない(504/5)

経済成長至上主義を断念すること。倹約を支持するキリスト教的価値の内面化。

②成長自体とそれを達成する政策との区別(504/6-506/2)

経済的成長自体はエコロジーの敵ではない

放棄できない特定の目標と一般化された経済成長（破壊的）との区別

キリスト教の目標はすべての人々が良き（快適・健全な）生活のための物質的手段を持つこと

③成長志向的な政策と権威主義的な強制によらない貧困の克服の例(506/3,4,5,6)

インドのケララ州の場合：女性による女性の教育

5) キリスト教の転換と経済・エコロジーの新しい関係

①キリスト教共同体内での必要性(506/7-507/3)

地球・大地が神の被造物であること、人間はその一部であること、神はそこにそれを通して見出されること、これらを強調すること

→ 神学の悔い改め：人間が大地の上にあるいはその外に立っているかのように考えることによって、大地の幸福をほとんど考慮せずに大地の搾取を許してきた思考と感情におけ

る、習慣的となっている人間中心主義的なパターンを転換すること社会的責任の感覚、社会分析の重要性の感覚の回復

②元来の意味に従って、経済とエコロジーとの連関を見直すこと(507/4-508/6)

家全体（人間とその他者）の研究、この家を秩序づける規則、現実の経済活動がこの規則に合致すること。エコロジーの基盤に立って、経済理論を再考すること（現代経済学の成果の放棄ではなく）、これには前提におけるいくつかの深い転換が要求される

- ・経済的人間を共同体における人格として再考すること
共同体自体に起こっていることを真の経済発展の尺度とする。生産と消費の増大が共同体を崩壊させるとき、それは経済的に肯定できるものではない
- ・経済的人間をその部分とする共同体は人間に限定できない
他の被造物と孤立しては繁栄できない、他の被造物の状態の改善は経済的利益である。
- ・共同体は未来へと広がっている
続く諸世代の幸福と他の種の未来の幸福は無視できない。
- ・共同体のメンバー（人間も非人間も）は他者に対する価値とそれ固有の価値とを持つ
- ・被造物の多様性は人間にとって重要な美的価値を増し加える
種の絶滅を避け、文化的多様性を保持する。
- ・科学技術をエコロジカルな仕方で適切なものとする
人間の必要を満たすことの犠牲を最小化する技術の使用。
- ・神はすべての被造物に配慮している
苦痛を軽減し楽しみを豊かにするために働くことの重要性。

6) グローバル化における経済と政治(508/7-510/1)

7) キリスト教—失敗と課題—(510/2,3)

①「われわれ西洋のキリスト教徒」(510/2)

信仰は愛の純粋に個人主義的な表現を越えて社会分析、社会倫理へと進むことを要求する。しかし、失望がある。環境危機への責任は主張されたが、ほとんど手つかずである。

②新しいヴィジョンを求めて(510/3)

われわれの失敗は、キリスト教信仰本来のものから帰結ではない。それは、むしろ、過去2世紀を特徴づけてきた思惟の分裂の進行を我々が受け容れてきたことの帰結である。いわゆる「専門家」を恐れすぎ彼らの前提を吟味するのに控えめすぎた。一切のものは相互に関連し合っており、エコロジーと経済学との区分別を突破する機会と責任がある。

この惑星における人間の存在の仕方（持続可能なだけでなく、再生的な）へと社会全体を向かわせ得る新しいヴィジョンを提供するように求められている。

8) 政治の復権とキリスト教の責任

12. まとめ

- ・環境と経済・政治とは一つの問題系を構成している。キリスト教思想研究は、問題系の再確認から議論を再構築する必要がある。そのための基礎理論としての自然神学の再考。
倫理的設定では射程が狭い。
- ・キリスト教思想の根本へ、そこから議論を構築すること。つまり、聖書解釈が争点となる。

<参考文献>

A. ホワイトヘッド

1. Alfred North Whitehead, *Science and the Modern World*, 1925 (1967).
A Free Press Paperback. (上田泰治・村上至孝訳『科学と近代世界』松籟社、1981年。)
2. *Process and Reality. An Essay in cosmology*, 1929 (1969)
A Free Press Paperback. (山本誠作訳『過程と実在』松籟社、1979年。)
3. *Adventures of Ideas*, 1933 (1967) A Free Press Paperback.
(山本誠作・菱木政晴訳『観念の冒険』松籟社、1982年。)

B. ホワイトヘッドについて

1. 山本誠作『ホワイトヘッドの宗教哲学』行路社。
2. 田中裕『ホワイトヘッド 有機体の哲学』講談社。
3. 栗林輝夫『現代神学の最前線』新教出版社。
4. 宮平望『現代アメリカ神学思想 平和・人権・環境の理念』新教出版社。
5. John B. Cobb, Jr. and David Ray Griffin, *Process Theology. An Introductory Exposition*, Westminster John Knox Press, 1976.
6. 特集「A. N. ホワイトヘッドの平和論」(全国日本学士会『ACADEMIA』No. 156、2016. 4)

C. そのほか

1. John B. Cobb Jr., *Process Theology as Political Theology*, Manchester University Press / The Westminster Press, 1982.
2. David Ray Griffin, *Religion and Scientific Naturalism. Overcoming the Conflicts*, State University of New York Press, 2000.
3. J・B・カブ『今からではもう遅すぎるか? — 環境問題とキリスト教』ヨルダン社、1999年。
4. 山本良一、高岡美佳編、SPEED研究会監修『地球温暖化への3つの選択 — 低炭素化・適応・気候変化のどれを選ぶか』生産性出版、2011年。
5. 池谷和信編『地球環境史からの問い — ヒトと自然の共生とは何か』岩波書店、2009年。